

ビバハウス便り NO.91 若者たちの自治活動の芽生え 2013・6・12

ビバハウス周辺の目覚しい季節の変化については、前号（特別号）にも書いたが、寒かった室内にも、目を見張るようなことが起こった。ビバ創設の当初から、大変お世話になり、いまでもお付き合いの絶えない札幌の友人の方が、実家のお母さんと一緒にマンション暮らしに代わるということで、お母さんが面倒を見てこられたサボテンを8鉢もプレゼントして下さったうちの4株が、一斉に真っ赤な花を咲かせ始めたのだ。人づてには、サボテンの花は毎年咲くものでもないとも聞いていたので、私自身この目でじかに実物を見て、その鮮やかさに心底びっくりさせられた。何かこれまでにないすばらしいことが起きる予感がした。

この3月から再び登町での本来の活動に戻ったが、すでにこれまでになかった変化と発展が現れている。若者たちの間に、自発的創造的な活動の芽生えが出始めたことにも目を見張らせられる。全国各地からの知らないもの同士の共同生活で、はじめはお互いにぎこちないことも多い。この状況を改善したいと、札幌出身で北星の卒業生でもあるM君の提案で、毎朝の「おはよう運動」が実施され、見る見る雰囲気はよくなった

入舟町での二つの別々の建物を利用した生活と違って、ビバハウスの大きなゆったりとした共同生活の場のお陰もあってか、メンバー同士の仲が格段によくなった。そして、まず「ボランティア活動推進委員会」が結成され、入舟宿舎周辺のおとしより宅訪問などに取り組む準備を始めたが、現在は、「メンバー自治委員会」と改変され、正副責任者も決定し、若者たちのさまざまな提案でいろいろな取り組みがすでに開始されている。第1回目の取り組みとして、先日早速「バーベキューパーティー」が実施され、すべての準備から、進行、後片付けまでを若者たちがやりきった。締めくくりにみんなでやった、団体戦じゃんけんゲームでは、すばやい合図で次の手を決めて戦う面白さにみんなが熱中し、今度はいつやろうかの声も早くも上がったほどだった。

若者たちの将来の就労支援と、「来るべき超高齢化社会」の到来を見越した、「若者・年寄り元気村構想」への実現にいいよ1歩を踏み出すことにした。ビバハウスから赤井川村に向けて車で約10分の約1万坪の山林、原野を活用する計画である。6月のはじめから、これまで長いお付き合いのある町内の建設会社で、雑木の伐採をすでに完了してもらい、6月末までに道路工事を仕上げただけのことになっている。

山林の中腹には、採石をした広い平地が確保できるので、当面はここを拠点に、お年寄りと若者たちがともにレクリエーションや山菜取りなどを楽しんでもらえる場にしたいと考えている。すでにこの構想に賛同し、ボランティアとして各分野で協力を申し出て下さった方が5人もいることは頼もしい限りである。

